

## 歌の周辺

昔、新幹線が無かったころの話だが、愛媛から東京へ行くのに、まず汽車に乗って高松から連絡船に乗り換え、そのあと再び汽車に乗って延々と走り続け、やっと辿り着いた。東京に着くまでに確か二十時間以上かかったと思う。

この歌は、途中の宇高連絡船の中での一場面である。どこかで捕まえた黄金虫を手のひらに載せ、まだまだ先が長い旅を思っている。「母のくに四国」と言ったのは、故郷への愛着があったからである。私は、故郷を愛しつつ都会に憧れるごく普通の青年だった。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・14

こがねむし手にあそばせて母のくに四  
国を出づる夜の船にをり

——『汽水の光』

【鑑賞】 船で離郷する際の歌。「母のくに」は「母なる」という意味もあろうが、故郷は父のくにでも、我のくにでもあるのだから、母への特別な思いが滲む。船は乗船から出港まで時があり、いま棧橋に停泊している。ここはまだ四国であり、もう四国ではない。そのもどかしさが初句二句に表現されている。

(大西淳子)



## ふるさとコレクション——185

### 戦災者慰霊の女神像（埼玉県熊谷市）

熊谷市街を流れる星川のほとりに〈戦災者慰霊之女神〉像が立つ。右手は天に向け、左手は手のひらで川の面を指すようなしぐさをしている。

作者は、あの長崎の平和祈念像の作者と同じ北村西望である。実は、熊谷市は昭和二十年八月十四日、なんと明日で戦争が終わろうとする前日に、市街が米軍の猛攻撃を受けて灰燼と化してしまったのである。星川には助けを求めて辿りついた人々が折り重なってあふれるほどだったと言われる。その星川のかたわらに立つ女神像の除幕式が行われたのは、終戦後三十年となる昭和五十年八月十六日と記録されている。

なお、熊谷市内にはもう一体の北村西望くまがいのあざむの彫像がある。熊谷駅で下車して駅頭近くのかなり目立つ所に熊谷直実騎馬像くまがいのあざむが立っている。以上は熊谷市立図書館にて教授を受けた。

（写真・解説 丹波 真人）